

誰もが楽しく通える

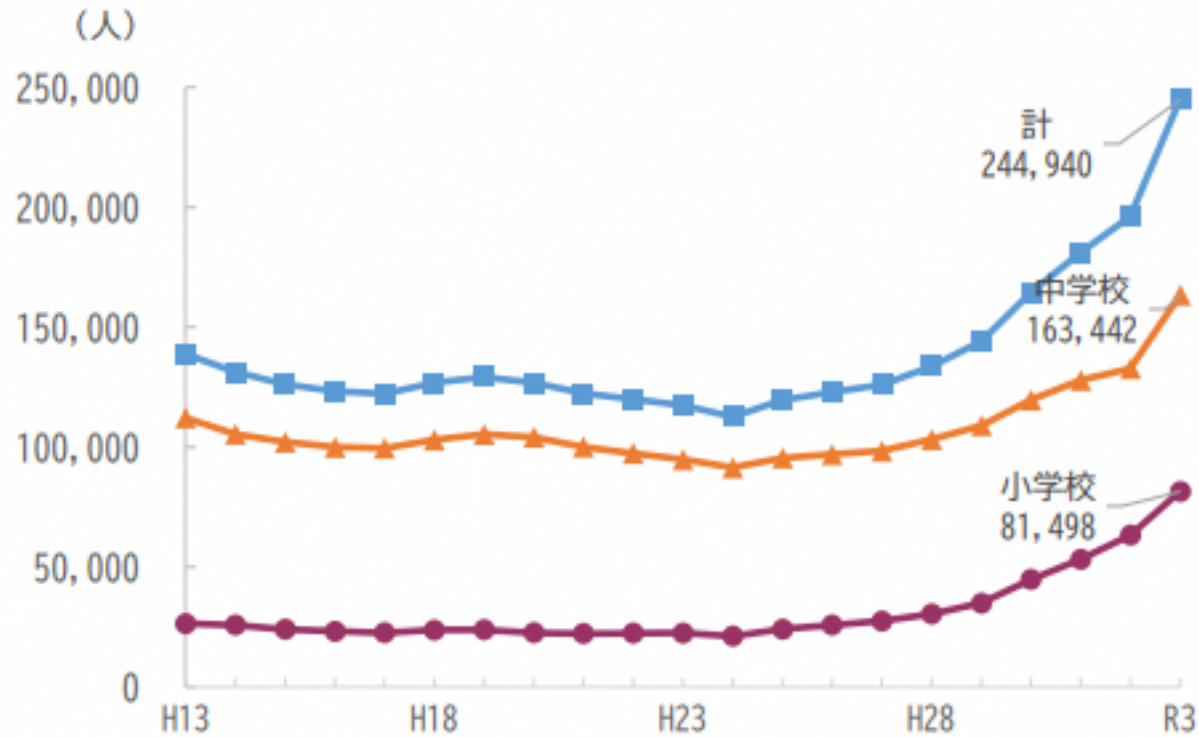
「魅力ある学校づくり」

富士市教育委員会学校教育課
教育指導室

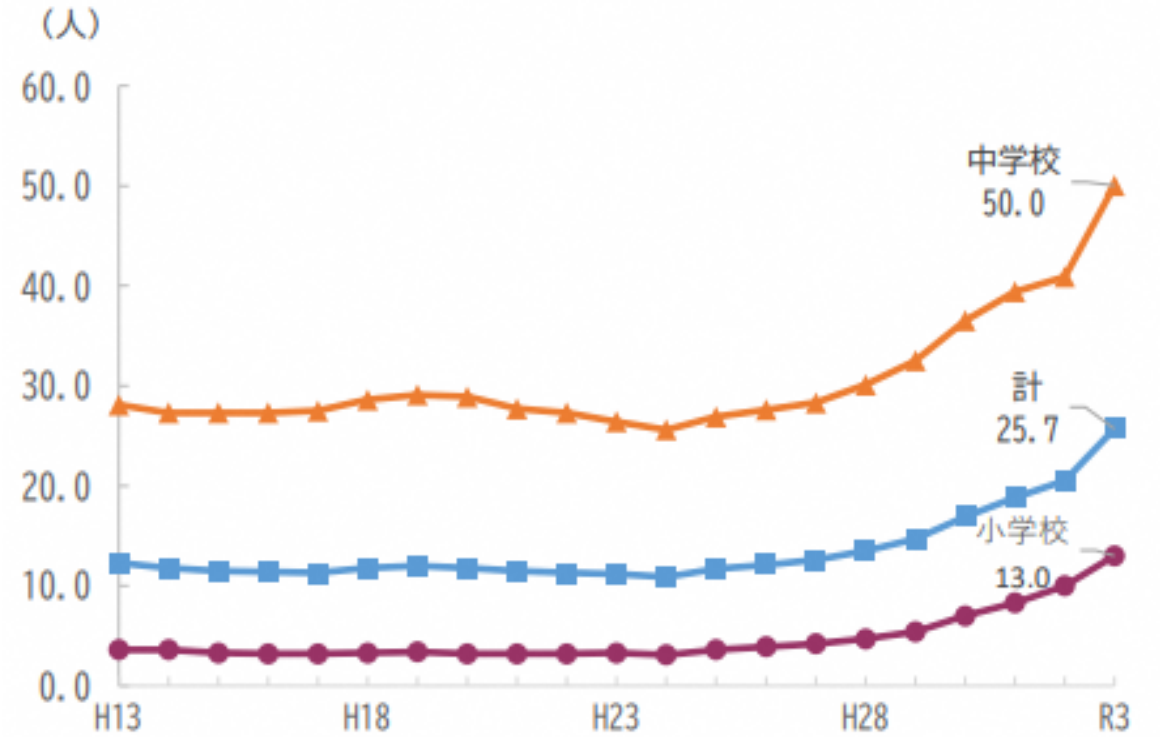


全国の不登校の状況

不登校児童生徒数の推移



不登校児童生徒数の推移 (1,000人当たり不登校児童生徒数)



令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果

学校の課題は複雑化・困難化

やることが
多すぎる

何からやればいいのか？何をやればいいのか？

先行きが
不透明だ

要求のレベ
ルが高い

働き方改革
なのに.....



チームとして対応

魅力ある学校づくり



『魅力ある学校づくり』



誰もが楽しく登校できる学校

=いじめ、問題行動、不登校等が生じにくい学校

教職員も楽しく働くことができる学校



同僚性

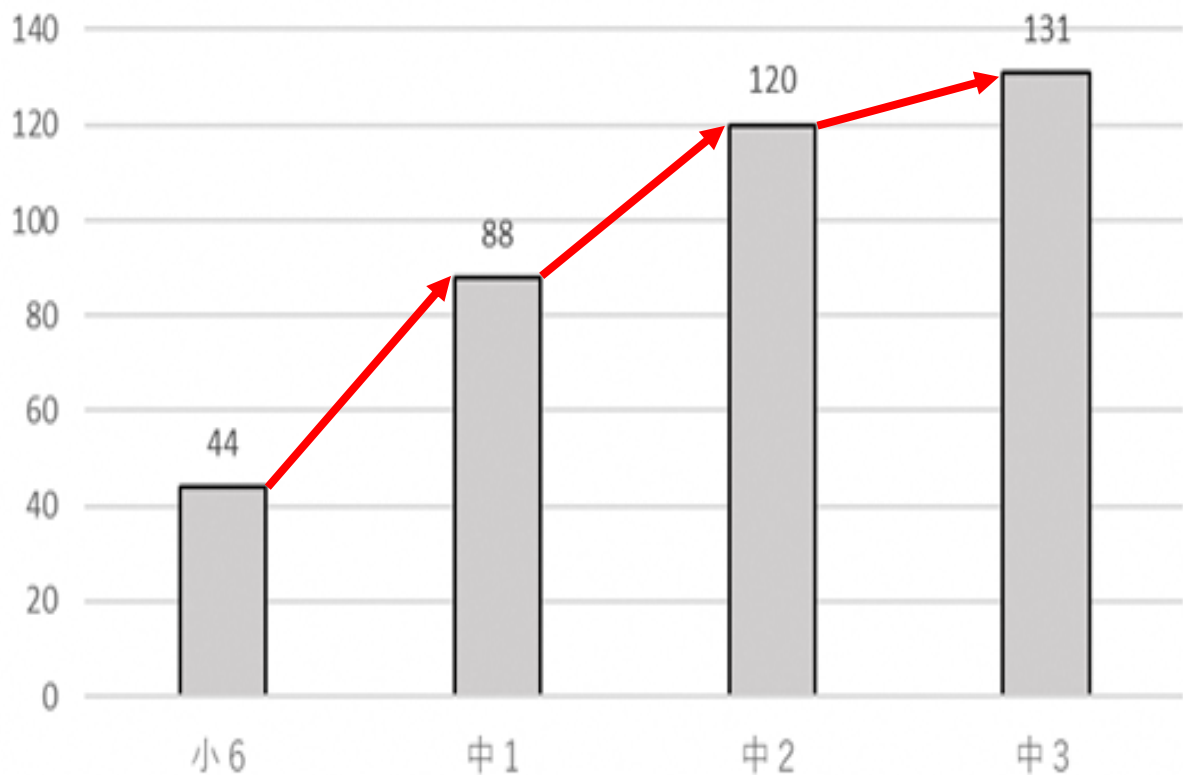
+

協働性

不登校の見方

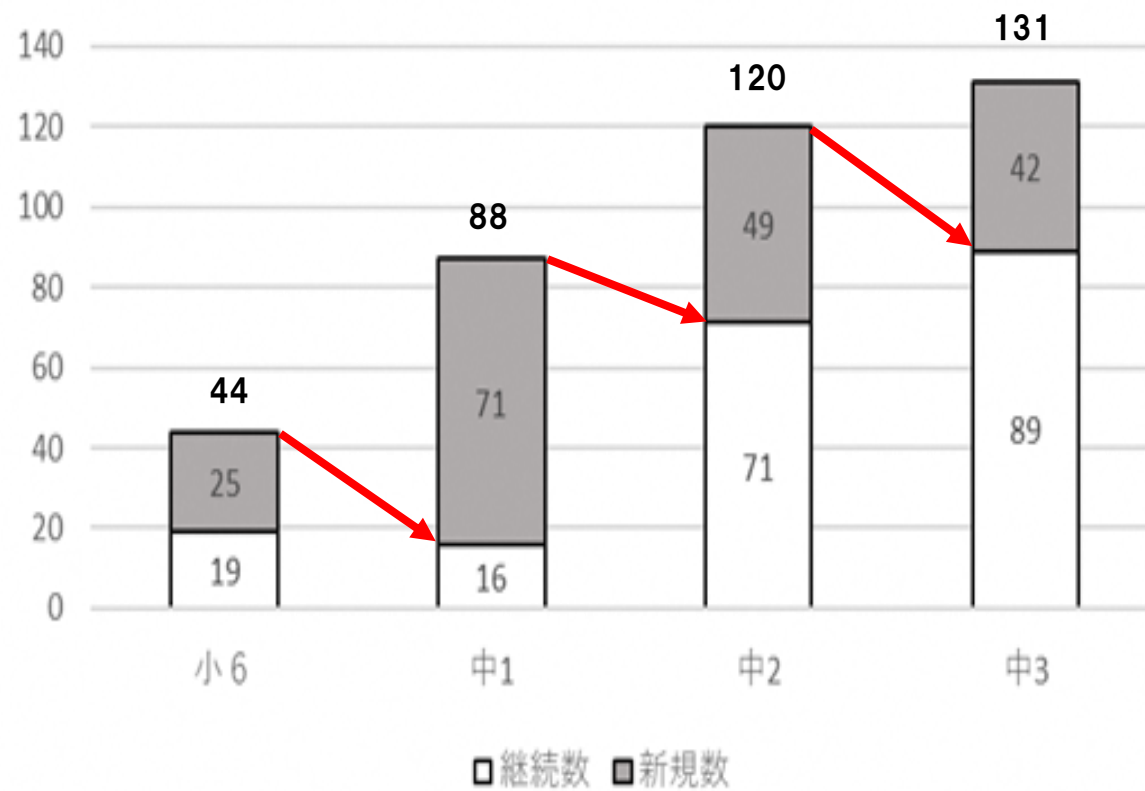
従来の見方

不登校人数

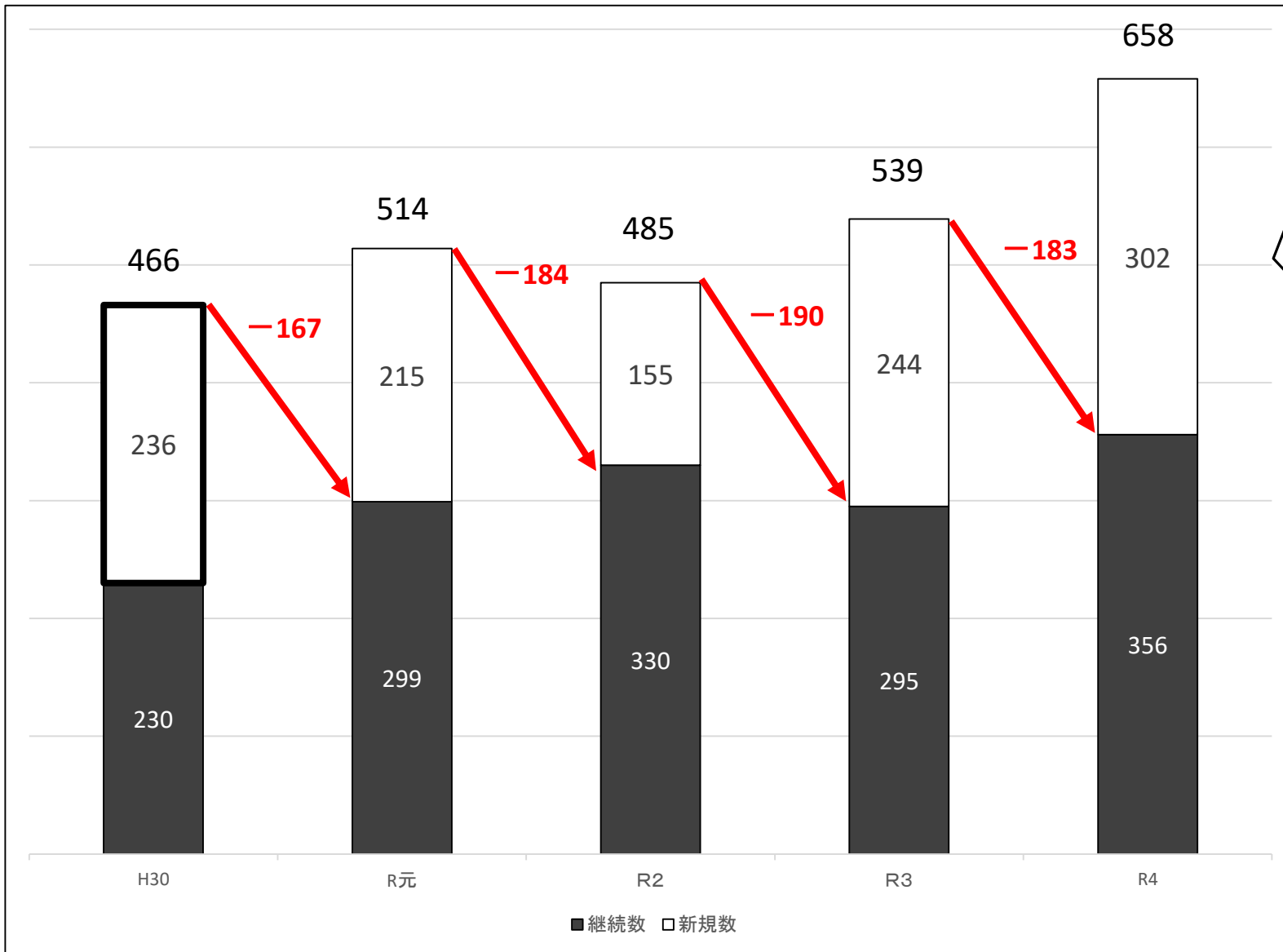


新しい見方

不登校学年別継続・新規数



新規・継続不登校人数



① 不登校児童生徒の何人かは、翌年度不登校状態が解消する。

⇒ 不登校数は学年が上がると一度「減る」

② 特に、中学校ではどの学年でも同じ程度の新規数が出現する。

⇒ 減った数以上に新規数が増えるから、学年が上がると結果的に不登校数は「増える」

不登校の3つの側面

| | 状態 | 取組 | 目的 | 対策 |
|----------|--------------------------|---|-------|------------------------------|
| 現在不登校でない | 兆しなし ↑ 集団指導 | すべての児童生徒に対する不登校にならないことを主目的とした取組 = 新たな不登校を生まない | 未然防止 | 未然防止 対象児童生徒 89% |
| | 個別支援 ↓ 兆しあり | 兆しが見えた一部の児童生徒に対して行う不登校にならないことを主目的とした取組 = 早期発見・早期対応 | | 初期対応 対象児童生徒 7% |
| 現在不登校である | | 現在不登校状態の児童生徒に対して行う自立支援の取組 | 社会的自立 | 自立支援 対象児童生徒 4% |

集団指導

すべての子供たちを対象

「自己決定」

「授業」

「居場所づくり」

「絆づくり」

「行事」

わかる授業
を行おう



学び合いの
楽しさを実
感させよう



子供たちの自主性
に任せてみよう

友達のよいこと
見つけをやって
みよう



「居場所づくり」「絆づくり」「自己決定」をキーワードに、「未然防止」に取り組む

学習指導要領

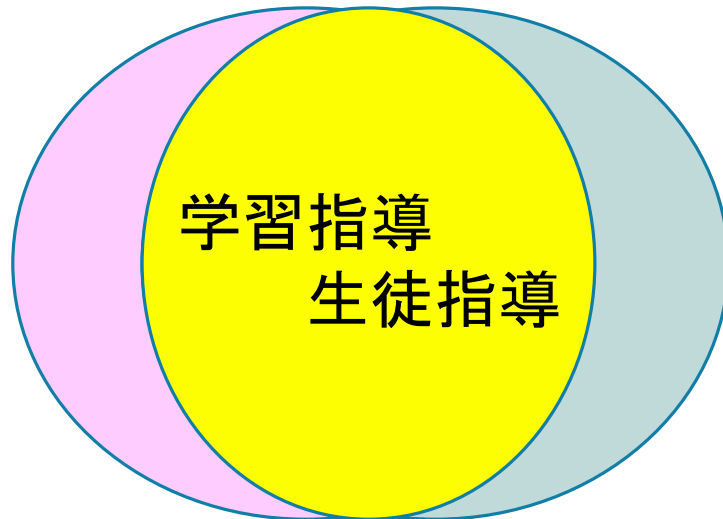
《これまで》

学習指導と生徒指導は学校教育において共に重要な意義をもつ

《現行》

両者は相互に深く関わるものであり、相互に関連付けながら、その一層の充実を図っていくことが必要

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



授業と生徒指導の一体化

自己存在感を与える
共感的な人間関係を育む
自己決定の場を与える

(1) 自己存在感を感受できるような配慮

「居場所づくり」

学校生活のあらゆる場面で、自己存在感、自己肯定感、自己有用感を育む

(2) 共感的な人間関係の育成

「絆づくり」

支持的で創造的な学級づくり

(3) 自己決定の場の提供

「自己決定」

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

(4) 安全・安心な風土の醸成

個性や多様性を認め合い、安心して授業や学校生活を送れるような風土

今までしていた学習活動も生徒指導であることを意識して働きかける

授業の中に生徒指導の三機能を意識した働きかけを意図的に取り組む

教師の言動や姿勢が変わる

まなざしが変わる

この場面(活動)は、あの子が活躍できそうだ

話し合いを上手に進行している子がいるぞ

あの子は結果は出ていないけど、いつも頑張っているなあ

声かけが変わる

「相手が自然に起きていてとても素敵です」

「間違いがあったからこそ、考えが深まったね」

「役割はメンバーで話し合って決めてね」

ふるまいが変わる

全員が応答できる発問を必ず一つは入れる

みんなに気遣いができた進行役をねぎらう

連絡帳によかったところを書く

温かいまなざし・声かけ・ふるまい等の積み重ねで

子供の自己指導能力を育てる

具体的な取組

焦点化

①児童生徒意識調査

人間関係

ア 学校が楽しい

イ みんなで何かするのは楽しい

学習

ウ 授業に主体的に取り組んでいる

エ 授業がよくわかる

| 当てはまる | どちらかといえば、当てはまる | どちらかといえば、当てはまらない | 当てはまらない |
|-------|----------------|------------------|---------|
|-------|----------------|------------------|---------|

1 2 3 4

1 2 3 4

1 2 3 4

1 2 3 4

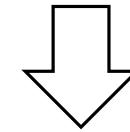
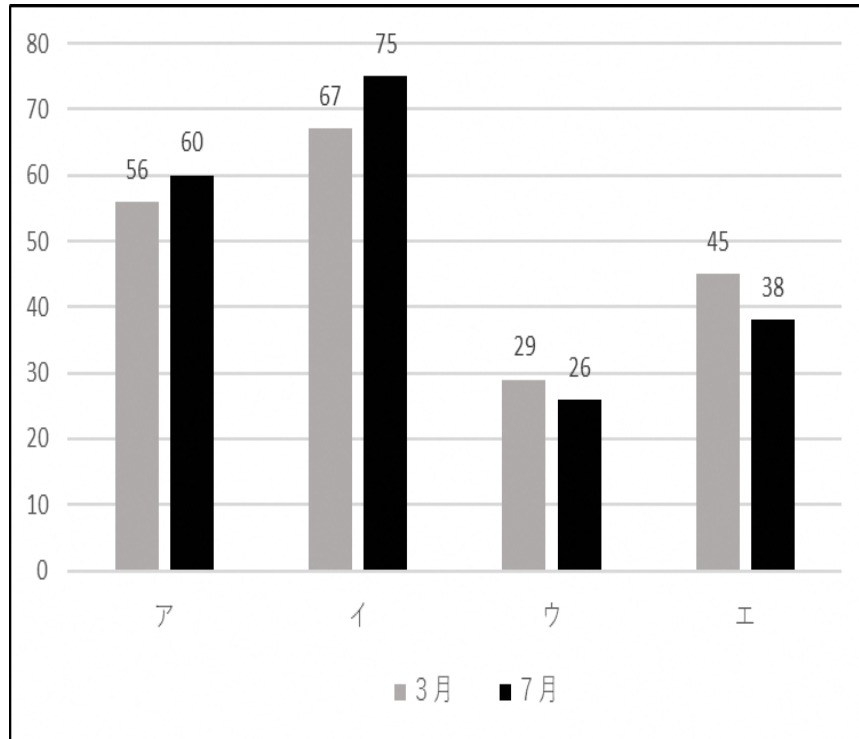
必要最小限の調査で負担軽減を図りながら意味のある取組

①無記名式

②学年単位で集計

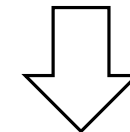
児童生徒意識調査(子供の声)でわかること

子供の「居場所、絆づくりの**浸透度**」と教師の感覚との**ずれ**

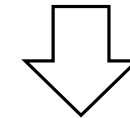


適切な点検

何故ずれたのか、取組のどこに原因があったのか、どう修正していくのかを教師全員で対話を通して確認する



ずれのない効果的な取組

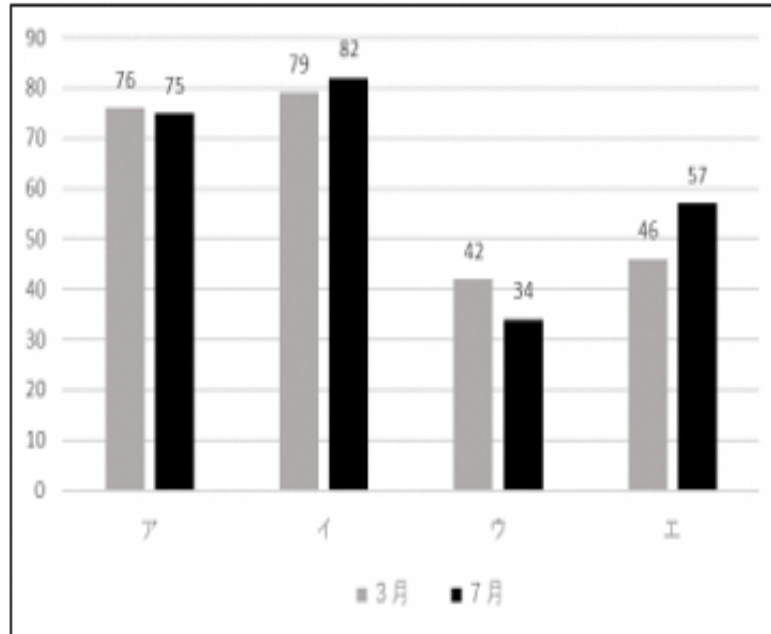


集団の質の向上

②プランニングシート(PDCAシート)

目標設定

1 調査結果(学年別棒グラフなどを貼る)



2 課題分析(1の調査結果から分かることだけに絞る)

明るく素直で真面目な子どもが多いため、与えられた課題には一生懸命に取り組むことができるが、「自分から」という意識をもたせることがまだ全くできていない。グループ活動をさせても、積極的な性格の子どもに頼ってしまう感じがある。一人一人が自分の役割をきちんと感じ、責任をもって、まずはグループの中で活躍できるようにさせたい。

調査結果

- ア 学校が楽しい
- イ みんなで何かをするのは楽しい
- ウ 授業に主体的に取り組んでいる
- エ 授業がよくわかる

分析

3 目標設定(2を受けて見直した取組の概要と、その結果到達するであろう見込み数値を設定)

一人一人が活躍できる場、自分の成果を自分で感じられる場を設定できる教科、単元に狙いを定め、授業構想を練る。

自己評価をきちんとし、「自分でできた」という思いをもつことができるように、授業の振り返りを習慣づける。達成感を味わえるようにする。

⇒⇒⇒ ウ主体性の項目 34%→45%に!

重点・強化する内容

4 目標達成に向けて8~12月に重点・強化する内容

子どもたちが受け身の授業ではなく、自分の考えや意見を表現できるような場を設定する。そのために、一人一人が主体的に取り組むことができるであろう、タブレットを用いての、学習内容のまとめや考えを表現する方法を考え、可能な限り授業に組み込む。

グループでの活動を活性化させ、一人一人の活躍の場を作る。

研修目標やクラス目標などの具体的な目標の文言に沿って、担任が子どもたちの表れを具体的に褒めるようにする。毎時間の振り返りを大切にする。

5 月別の取組計画（4 重点強化する内容に関わる事項を記載） *適宜、月・学年を変更、追加*

| | 全体 | 学年 |
|------|----|--|
| 8・9月 | | 理科：「風とゴムのはたらき」の実験…グループで協力して、 まとめを一人一人がきちんとする。 社会：「はたらく人とわたしたちの暮らし」…「買い物調べ」 自分の生活に密接している学習。主体的に調べる。 「私たちの市」…市庁舎、富士市各所の社会科見学。 たくさんの発見と疑問から、もっと調べたいという課 題をそれぞれがもつ。 算数：「長さ」…具体的に体を動かして学ぶ。 |



- ①取組を自分事にし、チームの効果を最大限に生かすため、**全ての教職員**で話し合う。
- ②意識調査の意味を理解し、話し合いをすれば、**教職員の共通理解**が図られる。
- ③ここでの負担や負担感は、トータルとして**負担軽減**につながる。

すべての子どもの
「心の居場所」となる学校

○**教職員が**、子どもが安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を提供する。

【安心安全な学校づくり】

- ・教師主導でも効く
- ・評価しやすい
- ・即効性がある

《大事なこと》

- * 適切な取組
- * 粘り強く続ける
- * バランスを考える
- * チームで取り組む

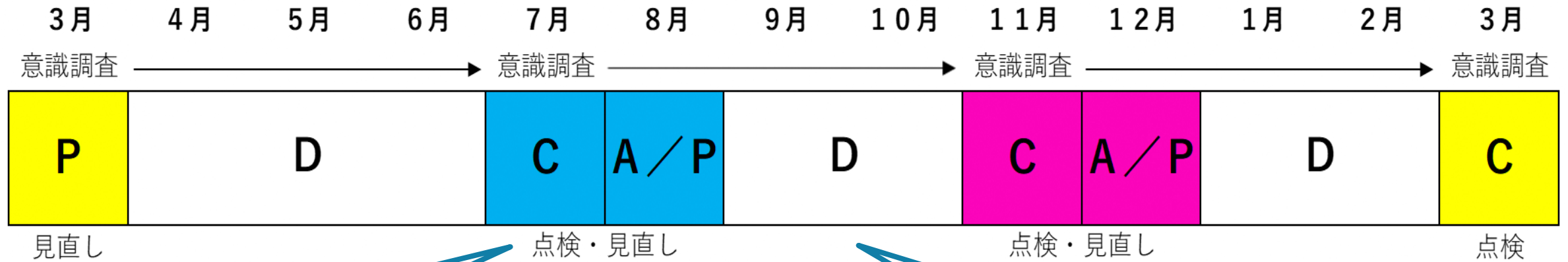
すべての子どもの
「絆づくりの場」となる学校

○**児童生徒が**、主体的に取り組む活動を通し、自らが「絆」を感じ取り、紡いでいく。

【場と機会の設定】

- ・成果が見えにくい
- ・評価しにくい
- ・取り組みにくい

④PDCAサイクルで実施



児童生徒意識調査

全教職員で取組を実施

- ①意識調査から課題を分析
- ②課題克服のための目標設定
- ③目標の達成に向けたプランを作成

PDCAサイクルを年間3回繰り返す

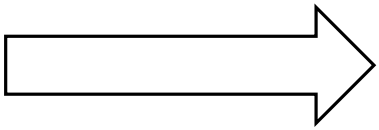
学校間連携のポイント ～連携の視点に広げる～

従来の連携

- ・特定の子供の情報
- ・取組をそろえる
- ・中学校からの乗り入れ

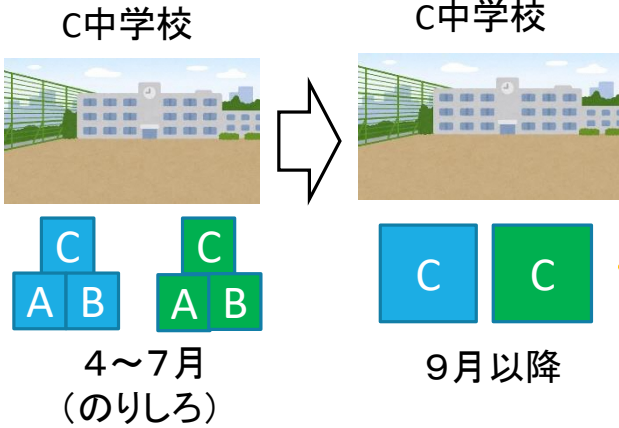
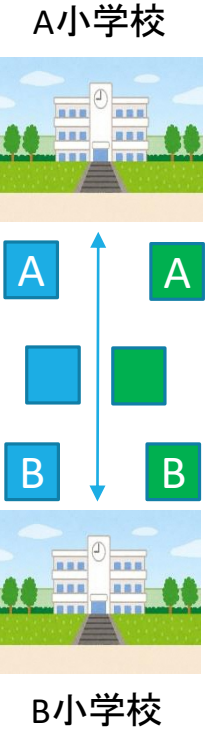
従来+集団指導の連携

- ・お互いを**知る**
- ・情報共有：**目的、「集団」の力**
- ・**一緒に**何ができるか
- ・**事前**に揃えられることはないか
何を揃え、何を揃えないか
- ・**将来**のために仕組んでおけることはないか
(特に**子供主体の取組**のアイデア)



「居場所づくり」「絆づくり」
「自己決定」を共通言語に
小中連携を進めていく

- 「居場所づくり」
- 「絆づくり」



オリジナル

前年度までに培った絆で4ヶ月を乗り越える
(学級指導、学年集団作り)

オ 叩かれたり、けられたり、強く
押されたりした(暴力を受けた)

カ 暴力ではないが、いじわるをさ
れたり、イヤな思いをさせられた

キ 叩いたり、けったり、強く押し
たりした(暴力をふるった)

ク 暴力ではないが、いじわるをさ
れたり、イヤな思いをさせた

授業や行事等に取り組んだことが、いじめの
被害と加害の減少につながったかどうか判
断するための指標



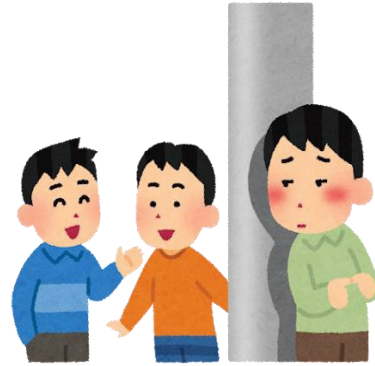
魅力の取組は不登校の新規数抑制だけでなく、いじめ・問題行動等の未然
防止にも成果を上げる。

教育機会確保法

(基本指針)

全ての児童生徒にとって、魅力あるより良い学校づくりを目指すとともに、いじめ、暴力行為、体罰等を許さないなど安心して教育を受けられる学校づくりを推進することが重要である。

不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われることが求められるが、支援に際しては、登校という結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある。



問題解決型ケース会議



「問題解決型ケース会議」活用ハンドブック
関西学院大学 馬場幸子 編著

「問題解決型ケース会議」の約束

- ① 会議参加者は必ず発言しよう
(参加責任を果たす)
- ② 他の人の意見を「もうやっています」
「それは無理」と否定したり「できるわけない」
と責めたりしない
- ③ 1つのステップごとに合意形成を果たしてから、
次のステップに進もう

会議の進行の仕方

①問題

問題の程度・頻度を含めて具体的に発言する。

②長所・強み

支援で役立てられそうな本人の「強み」を探す。

③目標

2～3か月で変わってほしい姿を、具体的に肯定的な表現で考える。

④背景要因

影響を与えている「背景要因」をさまざまな角度から検討する。

⑤支援方法

「誰が、いつ、どこで、どのくらいの頻度」で支援するのか具体的に決める。

⑥評価基準

評価方法や時期を決める。

効果

- ①担任1人で抱え込まなくて済む
- ②校内の「チーム力」がアップ、支援体制が強化される
- ③子供の適応が増し、教職員の負担感が減少

○児童生徒に効果的な支援ができ、状況が好転しているケースが多くある。

未然
防止

+

ケース
会議

=

「居場所づくり」

+

「絆づくり」

+

「自己決定」

=

授業

+

行事

=

魅力ある学校づくり

魅力ある学校づくりのまとめ

- ①新規不登校等は減る
- ②学校の負担は、意識調査とプランニングシート
- ③未然防止を図るので、教員の負担は減る
- ④学校のチーム力はアップする
- ⑤授業、特活、生徒指導の研修が進む
- ⑥小中一貫がより進むアイテム

【課題】

- ①即効性はない
- ②負担はゼロではない

